

児童健全育成賞（数納賞）佳作

里山の自然体験で元気っ子育て

山口県 山口市

ヒュッテ桂谷ランプの宿 マネージャー 畑山 静枝

第1章 里山再生活動の開始

まず最初に、里山に子どもたちを招いて、自然体験をさせるようになったいきさつから述べてみようと思う。

今から16年前の平成7年のことである。山口市小郡郊外の里山に揃って入った3人がいた。この里山および山林の持ち主である、山口鴻城高等学校理事長の小田穰亮先生（当時64歳）、東京で印刷出版業を営む佐伯清美さん（当時66歳）、そして宇部市の新聞社に勤務する私、畑山（当時47歳）である。佐伯さんは50歳の時、東京で季刊誌ふるさと紀行を創刊。執筆者を求めて全国行脚をするうち、日本の美しい自然が、高度経済成長の陰で開発を余儀なくされて、山や田畑、川などが荒廃の一途を辿って行く現状を見て心を痛めたという。そして、これでは日本の未来を担ってゆく子どもたちのためにはならない、なんとかして、子どもたちがのびのびと元気に遊べるような里山を復活したい、との思いを強くして、母校である鴻城高等学校の小田先生に相談された。すると、やはり同じ思いの小田先生から、「よかったら、私の山を活用して下さい」と、5000坪の山林を提供された。私は、ふるさと紀行の愛読者のひとりとして佐伯さんと交流があった関係で、この里山

再生の夢に賛同した。

余談になるが、私は30代前半で夫を亡くし、母子家庭の中で二人の子どもを育てた。仕事で忙しくして、子どもたちをあまり自然の中で遊ばせてやるゆとりもなかったため、この夢計画に、自分が成しえなかった悔いと期待を寄せた。この三者三様の、子どもたちに寄せる思いが、それからの里山再生活動へと発展していったのである。

第2章 ボランティア仲間とログハウスの建設

私は、ふるさと紀行の全国の愛読者を中心に、里山再生活動の主旨を伝え、ボランティアを募ったところ、多くの協力者が現れた。北は北海道から、南は熊本からと、辺鄙な過疎地の里山に駆けつけてくれて、スギの木を伐採し、皮剥きを手伝ってくれた。佐伯さんは、週末ごとに東京からやってきて、杉林の中にテントを張り、そこで4、5日滞在し、夜はランプを灯しての生活をしていた。佐伯さんは、「少々不便でも、将来、子どもたちのために、森の中にアスレチックを作ってやりたい夢がある。この里山を、昭和30年代の、貧しくても、心豊かで、まだ、人々が、夢と元気にあふれていた、そんな佳き時代にあった里山をここに蘇らせるん

だ」を、口癖のように言いながら、黙々と作業する姿に、いつしか、ボランティア仲間も増えて行き、夢に向かって一致団結していったのである。

もちろん、周辺里地の地元地権者である小田清さん、小田和良さんらの、この活動への理解と協力があればこそ出来たことであるが、当初は、なかなか理解してもらえず、悔しく、苦しい思いも何度かしたものである。しかし、念ずれば花開く、の言葉通り、平成12年、仲間たちの手作りログハウスは完成した。実に4年半かかり、汗と情熱の結晶であった。“ヒュッテ桂谷ランプの宿”の看板を掲げて、子どもたちがいっぱい来るのを待つばかりであった。その前に、もうひとつ、森の中に作らねばならないものがあつた。それは、既存の遊園地や公園にはない、ブランコやすべり台などの、木や竹を利用した自然遊具を作ることであつた。

いち早く、“童の森”と、名付けられた。

第3章 童の森づくり

そこは、杉林と違って雑木林なので、太い曲がりくねった木があるし、四方に枝を伸ばした木もある、子どもたちの遊具を作るのには最適な場所であつた。ここに、仲間たちと協力して、ブランコ、すべり台、シーソーなどを作つた。みんな、子どもに選んで、ワクワクしながら、まず、自分たちがそれらに乗って楽しみ、子どもだけではなく、大人も楽しめる場所となつた。なかでも、ダイナミックブランコ、と名付けたブランコは、大きな木の枝からロープをV字型に掛けた二人乗りのブランコで、スリル満点の揺れ方をする。また、すべり台は竹で出来ていて、木の高い所に梯子を上ってから滑るように工夫されている。

そのそばには、やはり、木の上に板を張って空中基地を作り、6メートルのロープを登って到着するようにした。これ以外に、古タイヤを活用した滑車リングや、ロープを四角に編み込んだロープ昇り、ターザンのように足を掛けて、空中に飛び出すターザンロープなど、さまざま

な遊具を作つた。

どの遊具も、子どもたちの好奇心と冒険心を刺激し、子ども本来の遊び力を養い、少々擦り傷や打撲はあつて当たり前、成長段階のステップの一つとみなす基本方針に基づいてのことだつた。

今の子どもと、昔の子どもの遊び方は、比較にならないほど変化が著しい。遊びだけではない、生活様式も、家族構成も、教育現場も、その時代と社会環境と共に変化してゆくのは止むを得ないだろう。しかし、いたずらに昔は良かった、では済まされない。その状態を作つたのは、他ならぬ大人の私たちなのだから。反省を込めて、童の森を完成させた。

第4章 子どもたちが里山に来た

最初、大人たちばかりで始めた里山再生活動だつたが、徐々に、口コミで広がって、童の森に親子連れが遊びに来るようになった。「わーっ、おもしろいブランコがあるよー」と、いち早くみつけた子どもたちは、親の手をふりほどくといちもくさんに森の中へ駆けてゆく。「危ないから、そっち、行っちゃダメ!」と、親が叱りつけている光景を私は何度も目にし、これは、親の方から再教育し直さねば、と思うこともしばしばである。そんなときは、「大丈夫ですから、お母さんは手を出さずに、遠くから見守ってあげてください。子どもさんは、すぐに順応しますから」と、忠告する。

実際、子どもたちは、嬉々として遊び始め、なかなか森から出て来ようとはしない。帰らないと言って、泣きだす子もいる。自然に溶け込んで、子ども本来の遊び力を発揮し始める時、子どもの瞳はキラキラと輝き、元気っ子そのものになっていく。これこそ、私たちの願い、夢が、叶つた瞬間である。それまでの、いろいろな苦勞も吹っ飛んでいく。

童の森での遊びに飽きた子どもたちは、次に川に入る。ログハウスの前には、岩がごろごろと無造作に転がり、清流がその間を水しぶきをあげて流れているのも、格好の遊び場なのだ。

夏場では、むしろ、川遊びの方が一番子どもたちには楽しいとみえ、まだオムツのとれない幼児も水遊びに熱中している。川には、小さな魚たちもいるし、カニもいる。生きものとふれあいながら、命の大切さも学べるこの里山の環境こそ、生きた教材ではあるまいか。残念ながら、今、子どもたちの身近では、川に入って小魚をすくいとれるような環境は失われている。

第5章 昔の暮らし体験をさせる

子どもたちをとりまく生活環境が、時代と共に激変したのを、傍観してばかりはいられない。現代人の価値観が、効率化や利便性を追求していく傾向の中であって、真に、子どもたちの幸せはあるのだろうか、という問いかけ、疑問は常に私たち里山活動のボランティア仲間を抱いていた。特に、戦争時代を体験し、過酷な少年時代を過ごして、自主自立の人生を生き抜いてきた、いわゆる高年齢者層の佐伯さんや、小田先生たちは、これからの日本を背負って行かねばならない子どもたちの学力の低下、基礎体力の低下を愁い、この里山で自然体験をさせることも大切だが、かつての、古き佳き時代の、昔の暮らし体験もさせることが重要であるとの認識を強くされた。

そこで、大人たちにとっては懐かしい、カマドでのご飯炊きや、薪割り、五右衛門風呂などを、子どもたちにも積極的に体験させようということになった。ご飯も、お風呂も、現代では、なんら手間暇かけることなく、スイッチボンでできる。すべてが電化製品でまかなえる。コンビニにいけば、なんでも揃うし、家族そろって夕食をしている子どもは少なくなっている、という実態調査の結果もある。こんなことでは、いざというとき生きていけるだろうか。もっと、逞しさを、生き抜く力を育ませたい。里山に来たら、せめて、昔の暮らしの真似ごとだけでも体験させて、今いかに便利な生活をしているかを、親子で実感させたい。私たちは、子どもたちに、マッチを擦って火をつける訓練から始め、カマドでご飯を炊かせているが、達成した喜び

が子どもの自信にもつながっていく。なかでも薪割りは、大好きな体験の一つのようである。

第6章 母親クラブへの取り組み

3年前の平成20年4月、私は、里山母親クラブ・どんぐりの会を立ち上げた。山口市の管轄である。当初、よく里山に来ていた親子、何組かに入ってもらい、活動を開始。このランプの宿居住地区には、残念ながら住民票登録者は佐伯さんだけで、今はだれも住んでいない古民家が6、7軒あるだけで、子どもは外部から来るだけだ。

すこし不安はあったが、やってみよう決心した。会長は私が務め、お母さんたちを役員にしてのスタートだった。

春には、親子で山登り。ランプの宿の後ろには、標高392メートルの禅定寺山が聳え立ち、花見を兼ねての親子のふれあい登山は好評だった。夏には、親子キャンプを計画。昔の暮らし体験はもちろんのこと、布ぞうり作りをさせたり、エコ工作にも取り組んだ。秋には、サツマイモの収穫をして、親子でサツマイモのおやつづくりもしたりした。包丁を使わせることも、大切な体験である。食べることの意味、料理の楽しさを体験させて、豊かな感性を養う、食育の重要性が、里山だけでなく多方面でも取り入れられている。冬ともなれば、焼いもだ、そのためには、枯れ枝を森から集めさせ、火をつける訓練をする。子どもたちは、焼いもが食べたいので、必死になる。これがいい。人任せにしない、自分でできることはやってみる、それを、自然と学ばせるいいチャンスでもある。親子の触れ合いにおいては、家庭の中では出来ない密度の高いふれあいができるようだ。親も、自然の中でわが子を見つめ直すゆとりが生まれるようだ。また、異年齢の子どもたちとの交流も生まれるのもいい。年長の子が、小さい子に優しく教えている光景は見ていてほほえましい。

第7章 保育園、幼稚園の遠足地となる

里山に遊びに来た親子連れの口コミや、母

親クラブの活動がだんだん周囲に広がり始めて、近隣の保育園や、幼稚園から、遠足に行きたいとの申し出を受けるようになった。それは、私たちの願ってもない喜びでもあったから、ボランティアスタッフを動員して、集団来訪を心待ちにした。

その前に、保育士さんらとは、綿密な打ち合わせをする。交通手段、遊びの方法、安全の確保など、しっかりと、これまでにない緊張感も抱いての打ち合わせとなる。ある保育園は、園舎から園児を電車に乗らせ、1時間余り歩いて里山に来ると言う。途中の風景を見ながら、交通安全にも気を配りつつ、園児たち50人がやってきた。先生たちも汗だくである。

佐伯さんが、まず、ここの小さな生き物の話をし、私が、三つの合言葉なるものを、園児の代表に言わせるのが習いである。みつつの合言葉とは、ひとつめ、あいさつをよくしよう。ふたつめ、ありがとうのころですごそう。みつつめ、あとかたづけをよくしよう。このみつつだけは守らせたいので、大きな声で言わせている。早くも、ブランコに乗ろうとしている子、川に入ろうとしている子など、それはもう、最初からにぎやかなことこの上ない。

森は、園児たちの赤、青の帽子で花が咲き乱れたようになる。ボランティアスタッフは、保育士さんの目の行き届かないところに注意を向けて、園児の安全確保の協力してくれるので、とてもありがたい。

単独で来訪し、遊んで帰る親子も歓迎だが、こうしてまとまって来られるのもうれしいものである。

第8章 小学校との連携、協働事業を試みる

子どもが幼いうちから、里山で自然体験させたいことは、私たちの基本的な願いであり、方針でもあったが、最近では、小学校と連携し一緒になってなにかの事業を協働でやってみたい、という夢が大きく膨らんできた。

しかし、学校の教育現場に直接踏み込み、交

渉していくには、私たちのこれまでの実践活動の成果が問われることは否めないが、PTAとの取り付けや、教師、校長サイドの里山理解度、カリキュラムそのものの課題など、ハードルはけっこう高いものがあるだろうとは、予測はしていたが、チャンスはおもいがけず巡ってきた。登山に来た、ある小学校のPTAの役員さんが、この施設を気に入って、6年生全員を夏休みに合宿に連れて行きたいと言われた。そして、自分が責任を持って、役員会に計り、校長、教師サイドを説得し、子どもたちにも納得させて、必ず連れて行きます、と力強く言われた。

本当にその通りになって、2011年の夏休み、6年生全員といっても、25人だが、一泊の体験合宿にやってきた。もちろん、私たちは大賛成、初めての学校という教育現場との協働事業となるので、大張りきりであった。しかし、多少の不安もあったことは事実だ。安全対策面が一番重要ポイントで、食事、寝具、トイレと、一応細心の注意を払った。食中毒など起こしたらそれこそ大変、また、子どもたちの健康チェックも、事前によく確認した。幸い、何人かの保護者の見守り隊がついてきたのと、大学生のボランティアを動員したので、多少なりとも負担が減った。

これは子どもゆめ基金の助成事業と連携して、大きな成果を上げた。

第9章 学校との協働事業の課題

私たちの、里山方式では通じない課題も幾つかあったので挙げてみる。

- ・個人情報の守秘義務とかで、記録写真を何枚か撮ったが、その中で、顔がはっきりと写った写真は、当然ながら学校からカットされて、もの侘しい活動記録となってしまったこと。これは、私たちの常識が薄かったことにも問題点があると反省。
- ・子どもがちょっとした擦り傷をしたとき、このくらいはなんでもないだろうと、里山感覚で対応したのだが、親としては深刻だったらしくすぐに病院に連れていかな

かったのかと、非難された。子どもも親のいいなりであったのが、とても残念であった。

- ・子どもたちの言葉使いなど、目に余るものは注意したが、一向に聞き分けのない子どももいて、先生の指導をお願いしたが、あまり効果はなかったように思われる。
- ・やはり、いじめの問題もあった。男児に叩かれて泣く女兒がいて廻りは素知らぬふりをするなど、根深しいじめの実態もかいまみた。
- ・登山をさせた時、嫌がって不平を言う子どもが多かったが、嫌なことも体験させて忍耐力をつけさせることも大事だと思った。

以上、私たちにとっても、とてもいい経験になったし、これから、また学校との連携、協働事業に取り組むことになるときの、チェック事項として、慎重かつ大胆に、子どもたちの成長過程を最優先とした里山体験プログラムを作って、実践していけたらと思う。

一方でアンケートを、親子と、そして教師を対象としてとったら、今回のような里山合宿は小学校最後の良い思い出となったと記入されており、またチャンスがあれば行きたいとのうれしい声もあった。

第10章 子どもを対象とした環境学習と歴史学習

自然体験や、昔の暮らし体験をさせるほか、自然環境についての学習も欠かせないと思い、里山に環境アドバイザーを招いての学習講座を開催した。これは一般から親子10組を募集し、2011年5月の連休に、登山を兼ねて実施した。

まず、禅定寺山の樹木についての説明。10年前より、県当局が、山桜15000本、松5000本などを植樹、この時、従来の雑木を殆ど伐採したため、山の保水能力が低下したようだ。一昨年のゲリラ豪雨により、山肌が削り取られて、無残な様相を呈しているのを目の前にして、参加者は、特に子どもたちは、びっくりして言葉も見失ったようだった。

それから、アドバイザーによる地球の温暖化問題についても説明がなされ、子どもたちからは、真剣な質問が飛び出していた。

やはり、こうした実際の現場での環境講座は、机の上では決して判らないものがあり、得難い体験だったと思う。あとのアンケートによると、参加してよかったが、90パーセントで、また、こんな機会があったら参加したいと、関心の高さがうかがえた。

ここの里山には、古い歴史があり、これについても、学んでもらいたくて、平山智昭先生による歴史講座も開催した。

この一帯は、350年前、農民たちが、関ヶ原の戦いに敗れて山口に封印された毛利一族へ、年貢米を作って納めていたと言われる、棚田の石垣が幾つも残っている。その中には、隠し田といわれる名残もあり、当時の苦しい生活ぶりや、稲作の大変さが窺がわれ、歴史の勉強にも役立つ。

第11章 子どもたちのボランティア参加

里山の環境や歴史を一通り説明したあとは、子どもたちにもボランティアに加わってもらい、大人と一緒に森林の整備をしてもらっている。なぜかという、いつか大人になる子どもたちにも、早くから、誰かのために力を出して、役に立てた時の喜びを体験してもらいたいためである。いわゆる、ボランティア精神を、里山体験を通じて、自然体で、身につけさせるプログラムである。小学生は、小学生なりの、無理のない作業プログラムを作ってやり、もちろん、私たちが、作業の手本をみせて、確実に、達成感を味わえる方法を工夫する。

どういったものかという、童の森の枯れ木拾いや、危険な石などの撤去。子どもたちは、遊びよりも嬉々としてやってくれるのが、何よりうれしい。本来、誰かのために役立ちたい、そして、褒められたい、認められたい、などの自己自立の本能が働くのだらう。もちろん、作業終了後は、しっかり認め、褒めることを忘れないようにやっている。

このプログラムは、親や、学校関係者にも喜ばれ、家庭では家事の手伝いなどしたことのない子どもが、積極的に手伝うようになったと、親から感謝されたこともあったし、担任の先生からは、返事を大きな声でするようになってきたと、言われたこともある。

里山では、とにかく、大きな声で返事をさせ、挨拶を徹底的にさせるので、自然と身に付くのであろう。家庭や学校で落ちこぼれた子どもほど、里山では認めてやりたい。どの子ども、可能性をいっぱい秘めているのだから。

第12章 社会教育委員や、 子ども未来課の委員となって

里山だけの、限られた狭い範囲での活動では、見えない、知らないこともいっぱいあるに違いない、と思った私は、市報をみては公募委員にテーマ作文を書いては応募した。幸いにも採用されたのが、2年の任期付きの社会教育委員と、子ども未来課の委員である。ふたつとも、青少年の健全育成に深く関係するので、会議には欠かさず出席し、外の委員さんの意見に耳を傾け、大いに学ぶチャンスを得た。

社会教育委員会では、国の方針に基づき、県としての施策を実践するため、おもに地域の教育力をテーマに掲げての、意見交換をしたが、私は、里山での実践活動を例に挙げて、とにかく、子どもたちには、自然に触れさせて、昔ながらの生活体験をさせ、この混迷の社会状況の中で、子どもたちがよりよく生き抜く力を育ててやることこそ重要ではないだろうかとの意見を言った。それには、家庭、地域、学校の三位一体の連携が大切なのは言うまでもないこと。里山は、その集合体と位置付けて、今後も支援活動をして行きたいと締めくくった。

今、問題となっている、いじめや、虐待など、重い課題にも目をそむけるわけにはいかない。もし、この問題に遭遇することがあれば、それこそ専門機関と相談し、子どもたちが発信する赤信号に早く気付いてやり、問題に対処したいと考えている。

子ども未来課の委員会議では、やはり、同様なテーマで話し合うが、私は、母親クラブの代表として、母親たちの生の声を伝えるようにしている。それは、ほとんどが、登下校の安全対策や、居場所問題だったりするが、すこしでも、実態を報告できたらと思っているし、その結果は通信などで母親たちに報告している。

第13章 これまでを振り返って、 今後の夢と課題

最初にいきさつを書いたが、今なお、現場の教育者である、小田先生、里山を再生して、未来ある子どもたちに残したいと言う夢を持つ佐伯さん、母子家庭故に、わが子に出来なかったことを、他人のこどもにしてやりたいと意気込んで活動している私の3人の、共通の夢、思いは達成されつつあるのだろうか。ここで、検証し、反省してみる必要があると思う。

個人の趣味的、快楽的欲望から発して、勇みがちな行動をとってはいないだろうか。社会的な貢献度合いは、どうだろうか。自己満足に終始してはいないだろうか。持続可能な方策を講じているだろうか。先駆性があるだろうか。後継者の育成に関しては、真剣に取り組んでいるだろうか。資金面では、無理のない建設的運営方法で、自助努力がなされているだろうか。里山に関わる全ての人たちの、真の幸福を自分のこととして、真剣に考えているだろうか。里山の環境整備を十分にやっているだろうか。

まだまだ、反省点はいっぱいあるが、これまでやってきた事業の仕分け整理をもっときちんとして、後継者につないでいくこと、が急務とも言える。志半ばにして、倒れることがないように、自分の健康はしっかりと守っていくのも大切なこと。反省ばかりではおれないので、これからの夢も語ろう。

第14章 里山に、えほんとおもちゃの 家をつくりたい

“夢は必ず叶う、思いを強く持てば一”

16年前、草ぼうぼうの荒れた里山に入り、

夢を語り合ったあの日のことは、今でも鮮烈に記憶している。まさか、何もなかったところから、ここまで達成できたとは、まさに夢を見ているようでもある。人は、誰も老いて行き、死んでいく。これは、まぎれもない真実。その、誰も避けては通れない、この世との決別の瞬間は、いつ、何どき、どこでか、誰も予測できない。だからこそ、面白く、今を生き抜くことのみ。できれば、叶えられそうにもない、でっかい夢を持ち続けたい。

というわけで、私たちは、今また、新たな夢に向かって進んでいる。

それは、現在、子ども支援と共に、高齢者の健康生きがい支援にもがんばっているけれど、みんな、よつといで一、集まっておいでよ一、気持ちを込めて、里山にもう一つ欲張って、えほんとおもちゃ、“どんぐり”の家をつくること。おっばいの必要な赤ちゃんから、おじいちゃん、おばあちゃん世代まで、ひとつの部屋に集まって、昔遊び、たとえばお手玉などをしたり、えほんの読み聞かせをしたりと、なごやかに、ゆったりと過ごせる空間づくりをすること。子育て経験たっぷりのおばあちゃんは、若い母親たちの、子育ての悩み相談に応じて、おじいちゃんは大きな孫と森遊び。そうして、命は受け継がれていく、祖先から営々と受け継がれて来た、この桜梅の里の、ように優しさや厳しさの中で。

すでに、各所から、絵本がたくさん寄贈されているし青写真も出来ている。私の耳には、明るい笑い声が響いて来た。

第15章 結びの言葉

ランプの宿を立ち上げて、今年で16年目、こうしていままでの、実践活動を、子育て支援のテーマに添って書き、報告出来るチャンスに恵まれたことに、いま、改めて感謝の思いでいっぱいである。

私たちの組織は、民間のボランティア任意団体として、県や市に登録され、地域社会においても、大分認められてきた。ここに至るまでには、多くの方々の物心両面にわたる支援、協力

があったことは、今更いうまでもないが、国や、県、市からの助成事業に採択されて、多くのイベントを実施し、施設もかなり充実してきたことも記しておかねばならないだろう。それだけ、責任も生じ、期待にも応えたいと、日々仲間たちとがんばっている。

しかし、どこの団体も悩むように、仲間の高齢化が進んでいる。私たちの団体も例外ではない。代表の佐伯清美さんは、82歳になっても、毎日、子どもたちの夢実現のために、里山の整備に余念がない。小田先生、平山先生も同様に80歳だが、とてもお元気でボランティア活動をされている。このように、高齢者たちが、一生懸命、汗を流して、活動をしているのを見るにつけ、団塊世代真っ只中の私は、ピシッと、背中を叩かれる思いだ。

昨年、こうした生涯現役人生を歩んでいる仲間の多い団体ということで、内閣府より“社会章”なる顕彰を受けた。これでまた、更に元気発奮、里山の春を彩ろうと、桜を記念に植えたばかりである。

桜の咲くころ、子どもたちで賑わうことを夢見て、明日を迎えよう。